OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Usefulness of carer-held records to support informal caregivers of patients with dementia who live at home
Author(s)	佐藤, 俊介
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69414
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）　佐藤　俊介

論文審査担当者	（職）	氏　名
主　査	大阪大学教授	池田 学
副　査	大阪大学教授	磯 博康
副　査	大阪大学教授	桑木 宏史

論文審査の結果の要旨

本研究では、認知症患者の家族支援と診療・介護連携のために用いられつつある情報共有ノートの有用性を検証した。まず、情報共有ノートを、兵庫県川西市の在宅認知症患者の家族のうち、希望者に配布した。そして、家族、医療者、介護従事者、ケアマネジャー等が、当該患者に関する医療や介護の情報を適宜ノートに記載した。またノート使用者が、適切な使用法を学びあうために毎月連絡会を開催した。家族介護者に対して、ノート使用前と使用開始1年半後にアンケート調査を実施した結果として、ノートの使用により、家族、医療者、介護従事者間の連携と、家族介護者への患者に関する情報提供が改善したことが明らかになった。本論文の結果は、認知症患者を支援する家族、医療者、介護従事者間の連携や、家族への情報提供に対して、ノートが有用であることを示したという点で意義があり、博士（医学）の学位授与に値する。

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　名 Name	佐藤　俊介
論文題名 Title	Usefulness of carer-held records to support informal caregivers of patients with dementia who live at home （在宅認知症患者の家族介護者支援に対する情報共有ノートの有用性）

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

在宅認知症患者は、家族や医療者、介護従事者の支援を得て、日常生活を送っている。多くの認知症疾患は進行性であり、また患者の症状は様々な環境要因によって容易に変化するため、患者の医療や介護に関わる人々が連携し、情報を共有することは重要である。しかし、家族と医療者、介護従事者間での連携は円滑になされていない。また、家族介護者は、患者の介護に関する情報を必要としているが、十分に得られていない。近年、認知症患者の家族介護者支援と診療・介護連携のために、情報共有ノート（ノート）が用いられている。しかし、その有用性は十分検証されていない。本研究では、家族と医療者、介護従事者間の連携と、家族介護者への情報提供に対する、ノートの有用性を検証することを目的として、兵庫県川西市において全市的にノートを導入し、家族介護者にアンケート調査を実施した。

〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕

川西市の在宅認知症患者の家族介護者のうち、希望者にノートを配布した。ノートの運用方法は、普段は家族介護者がノートを保有し、患者が通院あるいは通所する際に、家族介護者がノートを持参することとした。全てのノート使用者は、情報を伝えたい人、あるいは質問に回答してほしい人を指名した上で、共有すべき情報や質問を記載し、それに対して、指名された人が回答する仕組みとした。例えば、家族介護者が、対応に困った患者の症状などを記載し、医療者や介護従事者が、自身が行った診療や介護に関する情報などを記載した。ノートの運用と並行して、ノート使用者が、適切な使用法について議論し、学びあう場として、川西市の各地で、毎月連絡会を開催した。

家族介護者に対して、ノート使用前と使用開始1年半後に、同じ内容のアンケート調査を行った。アンケートは、家族や医療者、介護従事者間で連携が円滑になされているかどうかを問う、連携に関する7つの質問と、家族が患者に関わる有益な情報を得られているかどうかを問う、情報提供に関する3つの質問で構成された。これらの質問は全てはい/いいえ形式であり、はいと答えた質問数を合計して、連携得点と情報提供得点を算出した。アンケート調査に合わせて、ノート使用前と使用開始1年半後に、介護負担をZarit Caregiver Burden Interview (ZBI)で、患者の精神症状をDementia Behavior Disturbance Scale (DBD)で評価した。

201名の家族介護者がノートの使用を開始した。その内、74名が1年半ノートを継続使用し、アンケート調査の対象となった。ノート使用前と使用開始1年半後の各得点を、Wilcoxon signed rank testで比較したところ、ノート使用後、対象者全体で、情報提供得点が有意に改善し、DBDが有意に増悪した。またケアマネジャーの連絡会への参加頻度がノートの効果に与える影響を検証するために、担当のケアマネジャーが連絡会に2回以上参加した家族介護者と、1回以下しか参加しなかった家族介護者に群分けした。各群で上述のWilcoxon signed rank testを行ったところ、ノート使用後、担当のケアマネジャーが連絡会に2回以上参加した家族介護者において、連携得点と情報提供得点が有意に改善し、DBDが有意に増悪した。担当のケアマネジャーが連絡会に1回以下しか参加しなかった家族介護者では、ノート使用後に有意な変化を認めなかった。

〔総　括(Conclusion)〕

認知症医療において、ノートを使用することで、家族介護者への、患者に関わる有益な情報の提供を促進することが示された。また、担当のケアマネジャーがノートの適切な使用法を学ぶことで、家族と医療者、介護従事者間の連携を促進しうることも明らかになった。